

島田雅彦

子どもを救え！



子どもを救え！

島田雅彦

文藝春秋

子どもを救え！

平成十年五月三十日 第一刷

定価はカヴァーに表示してあります

著 者 島 田 雅 彦

発 行 者 和 田 宏

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋
〒一〇二一八〇〇八 東京都千代田区紀尾井町三ー三三

印 刷 大日本印刷
製 本 加藤製本

© Masahiko Shimada 1998 Printed in Japan
ISBN4-16-317740-X

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取
替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

目 次

1	御主人は御病氣ですか？	6
2	殺されたのは誰？	12
3	誰もいないの、みんな死んだのよ	25
4	人殺しには匂がある	31
5	パパ、なんで人殺しをするの？	42
6	どうして中で出してくれないの？	49
7	ひょっとして、千鳥君？	61
8	パパ、お仕事に行ったの？	80
9	彼女はいつでもOK	92
10	茶の間は墓にもなる	98
11	道徳と聞くと、憶い出す	110
12	軽薄なお問抜けちゃんの倫理	118
13	ヒステリーでも起こさなきゃ、やってられないわ	122
14	死神おじさんVS座敷わらし	132
15	パパ、くさいよ	140

16	どんなパパになるつもりなの？	155
17	フェイク・パパ	169
18	素晴らしきアウトドア・ライフ	179
19	射精と人殺しは……	195
20	退屈な裁判の代わりに	210
21	私がママですよ	215
22	昔のアルバムを見ていたら、涙が出てきた	221
23	自殺しないために無駄使いをするの	236
24	眠いなら、外で寝なさい	249
25	私はそんなに欲が深かったのでしょうか？	261
26	それは疲労というよりは摩耗である	267
27	再び独身者に戻ろう	274
28	家族の幻	278
29	自由の刑と馴れ合うために	290
30	パパがいなくなつて、子供はちゃんと育つ	304

写真 北島敬三
装幀 大久保明子

子どもを救え！

1 御主人は御病氣ですか？

郊外の同じ住宅地に住む、顔見知りの奥さんとその子供二人が何者かに殺され、海に捨てられた十月三十一日の午前二時頃、小説家は偶然、その海を望むホテルの一室で愛人の指圧にうめき声をあげていた。

愛人はセックスのあと、決まって小説家の背中に馬乗りになり、彼のけだるい背中を丹念に揉みほぐしてくれる。

——射精したあとのあなたって叱られた子供みたいな顔してるのね。

その夜、彼女はこんなことをいった。それは本人だけが知っていればいい顔で、他人に公開するような代物ではなかった。射精を終えてフツと顔をもたげると、角度によっては部屋の鏡にうしろめたい顔をさらしている自分と対面することになる。そいつは、ああ、またやっちゃった、といわんばかりだ。これまで肉体を重ね合せたどの女に対しても、妻に対してさえも向けまいとしてきたその表情を彼女に読まれてしまい、ばつが悪かった。小説家は一刻も早くそこから立ち去りたかった。どういうわけか、性交を終えたあと、小説家はむしろに書斎に戻りたくなる。このうしろめたさを言葉でかき消してしまいたいと思う。筆一本で恥を栄光にも書き換えるのが自分の商売だと何処かで信じている。

愛人の体はいつまでも火照っている。最近、「あなたの子供が欲しい」といわれて、うまく誤

魔化し切れなかったのが尾を引いている。子供を欲しがる女の体は腫に入ってきた精子が元気に卵子のもとへ泳ぎ着くまでエクスタシーを引きずる。一方、男の背中や尻は射精直後から冷たくなっている。小説家の背中に馬乗りになった愛人はそれが気持ちいいという。一時的に下半身が冷えるのは、次の性交に備えて、精子の再生産をうながすためらしい。小説家はそんな遺伝子の命令に従い、とつとこの場を去り、別の相手が待つベッドに馳せ参じたいとも思うのだった。もちろん、彼はそんな素振りを見せたつもりはない。でも、愛人にはすっかり気取られている。彼女は小説家に今しばらく同じベッドにとどまる理由を与えるつもりで、指圧を施してやるのだ。必ず、子守唄のおまけもついてくる。指圧は時にピストン運動に勝る快感をもたらししてくれる。子守唄をハミングするのも、背中をマッサージするのもセックスの続きなのだ。小説家は愛人からツボの見つけ方を教わり、別の女の体で試してみたことがある。何か親密の度合いが増し、女は長居をしたがる。

愛人の体の火照りが移り、指圧で筋肉がほぐれると、全身の血の巡りがよくなり、小説家は眠気に襲われる。ついさっきまで、射精の虚脱感に急かされ、早く帰ろうとしていたのに、それすら億劫になり、子守唄を聞いているあいだに家に着かないかなどと思っている。ホテルの部屋が自分の家で、愛人が妻になり代わってあればいいのと思う。夜が明けるまであと二時間あるから、仮眠くらいはできると思ったとたん、夢を見ている。

牛の胃袋のように脳味噌が四つあって、用途に応じて使い分けている。一つはペニスと直結した女たらし脳、一つは子供の頃のままの無邪気な脳、一つは論理を組み立てる脳、残る一つは他

人が考えていることをそのまま盗むことのできる脳。小説家は以上四つの脳で見えるもの聞くもの、嗅ぐもの食うもの、触るもの感じるものを処理する。

と夢の中では思い込んでいる。小説家は家に帰ってくると、台所に直行し、流しにザルを置き、そこに四つの脳味噌を嘔吐と同じ要領で、音を立てながら吐き出す。白、灰色、クリーム色、ピンクの四つの柔かい脳を小説家は水洗いし、その日考えたことを忘れる。「考えたこと」は水に流すと、油のように七色の玉になる。一番落ちにくいのは他人の考えを盗む脳についた汚れだ。それはアルコールをかけなければ、なかなか落ちない。汚れを落とした脳は一つずつ歯で傷をつけないように丸呑みする。にわかに風呂上りの爽やかな放心状態に包まれる。

そんな夢から目覚めたら、外は薄い灰色に変わっていた。夢の中ではすでに家に帰っていたが、目覚めると、ホテルの部屋に押し戻されていた。愛人は謎の微笑を浮べて眠りこけている。小説家はシャワーを浴び、股間を丹念に洗うと、急いで身仕度をした。窓からYS公園を見下ろしながら、ぬるいほうじ茶で喉の渴きを癒すと、愛人を目覚めさせぬように静かに部屋を出た。

ピッタリ一時間後に小説家は書斎のベッドに戻ってきたものの、寝つくことができない。背中にまだ愛人の影が張りついていて、耳許で寝息を立てている。首のあたりにはまだかすかに愛人の残り香がついている。

小説家はいつも書斎のベッドで一人寝をする。時にはベッドが書斎にもなる。ベッドで本を読み、日記をつけ、出版社や愛人に電話もかける。ここには妻が入ってくる余地はない。妻は一階

の畳の部屋で子供と並んで眠る。新婚旅行までは一つのベッドで眠っていたが、妻の歯ぎしりは子守唄にはならず、妻は妻で小説家の貧乏ゆすりでベッドが揺さぶられるのを嫌い、すぐにベッドを一つ買い足した。けれども、小説家はベッドで遅くまで内職をする独身時代の癖が脱けず、妻の寝不足を誘った。結局、結婚二ヶ月目から寝室も別々になった。セックスはどちらかの寝室を訪ねるかたちで行なわれたが、自然に回数は減っていった。妻の寝室を訪ねるのも、愛人の寝室を訪ねるのも大した違いはないと思うようになったのは結婚一年後くらいだ。もともと、愛人は小説家の寝室を訪ねてくることはないで、それだけは妻の特権かもしれない。妻にしてみれば、そんな特権をありがたく思ったことなど一度もないだろう。むしろ、最近は書斎に入っているのを敬遠している。週に一回、妻は書斎に掃除機をかけるが、それ以外はあまり寄りつかない。このあいだ、妻は聞こえよがしに、「まるで家に独身の男が下宿してるみたい」と呟いた。小説家は冗談めかして「胸がときめくってわけか」というと、露骨に嫌悪感を剥き出して、妻はいい放った。

——何か不潔な感じがして。

小説家が「今さら何いってんだ」とふてくされると、彼女はそっぽを向いて「だってさ」といった。

——よその女の気配がするし、あなたはそこでよその女のことばかり考えてるんでしょ。

一度浮気がバレて以来、妻はなにかという、鎌をかけてくる。小説家はあくまでシラを切り通すが、一度失われた信用は二度と回復できないと諦めている。妻は自分の体面を保つために夫

の浮気を認めない。たぶん、離婚もする気はない。「少なくとも、子供が大きくなるまでは仲よくしましょう」と妻はいう。小説家も何となくそうしようと思う。子供が可愛いうちは一つ屋根の下にいたい。やがて、子供が親に向って「あんたみたいなのが世の中を退屈してるんだ」などという口をきき出したら、潮時と見て妻子を捨ててやろうという計画を小説家は密かに練っていた。けれども、妻の方も似たような計画を立てていることをこのあいだ知った。妻は子供が頼りにならないとわかった時点で財産を二等分して家庭から亡命するつもりだ。そして、ボランティア活動しながら新しい相手を探して、静かな生活を送るのだそう。その時、妻は四〇代の半ばをとうに越している。妻はその時、どういう男を選ぶのか、小説家は興味をそそられる。相手も子持ちか？ 離婚経験者か？ 年下の甘えん坊か？ 外国人か？ いずれにせよ、つまらない男にひっかからないで欲しい。別れてしまえば、前夫の知ったことではないはずだが、なるべく誠実で、健康で、金もある男を選んで欲しいと思う。

なぜか？

妻が新たに選んだ相手によって、前夫はどの程度の男として見られていたかがわかるからだ。妻はある時、宣言した。

—— どういう女とつき合ってるのか知らないけど、私以下の馬鹿女だったら許さないからね。どうせつき合うなら、フェミニストとつき合いなさい。レズビアン。あなたの立つ瀬がないはずだから。

教育ならば、愛人にしてもらっている、と小説家は答えたいところだった。離婚して一人身に

なつてもモテる男でいたいがためにあえて妻や愛人による教育を受け容れようと彼は思う。妻も不安定な未来に向けて、容姿や頭の衰えを最小限に食い止めておくに越したことはない。

午後二時過ぎ、電話の呼び出し音で目覚めた。いつまでも鳴り止まないのも、家にいるのは自分一人だと気づいた。受話器を取った時には切れていた。

シャワーを浴び、チキンラーメンに湯を差し、卵を落とした。新聞を読みながら、細くちぢれためんをすすする。毎日、昼過ぎに起きて、こんなものばかり食べている。妻と子供は社交に忙しいので、不潔な独身者の世話をやいている暇はない。

インターフォンが鳴る。「宅配便です」の声。妻がまた通信販売で買物をした。パジャマのまま印鑑を持って玄関に出る。配達人はいつも怪訝そうな顔をしている。保険の勧誘のおばさんは「御主人は御病氣ですか？」と余計な心配をする。体はまあまあだが、脳の方が少し。いつかそういつてやろうと思うが、怪しまれるのは損なのでやめる。

再び書斎に戻り、一応机に向う。送られてきた本を読む。電話を取る。原稿の依頼を断わる。煙草を吸う。煙草が切れる。坂の下のかしわやまで買いにゆく。日が暮れる。

2 殺されたのは誰？

小説家とも顔見知りの母子三人がYH港に捨てられたあの夜から三日後、最初に奥さんの死体がDK大橋のたもと、火力発電所の取水口付近に浮び上つてきた。『SONIA RYKIEL』の黄色のトレーナー、焦げ茶色のスカートに素脚という恰好のまま白いビニールのゴミ袋と青白黄三色のヒモで梱包された彼女の死体はバイナッブルを抱かされて、午前二時頃、首都高速YHDK線から海に落とされた。バイナッブルというのはヤクザの世界の隠語で鉄アレイのことだ。バイナッブルを抱かせるというと、土左衛門にすることを意味すると、暴力団関係の記事が多い週刊誌で読んだことがある。セメントで固めてから海に捨てるマフィアのやり方、頭と胴体を切り離して別々の場所に捨てる中国マフィアのやり方と較べると、鉄アレイを抱かせるだけのやり方は手抜きで、死体が浮び上る確率が高くなる。水死体の浮力は鉄アレイをも浮せるほどになると、犯人は予想できなかったのだろうか？

それから五日後、母親の死体が浮び上つたのとはほぼ同じ場所に二歳の長女の死体が水面に上つてきた。身長約九〇センチ。黒の長そでポロシャツに茶色のジャンパースカート、そしてスヌービーの白いパンツをはいていた。さらにその四日後の十一月十二日、今度は一歳の長男が同じビニール袋とヒモで梱包され、鉄アレイつきで発見された。母親の死体が浮び上つた現場から一〇〇メートル離れた海の底に紙おむつをしたまま沈んでいた。

死体は大きな順に発見された。

小説家は事件の報道を新聞で読んだが、何ゆえにこの三人の母子は殺されなければならないかたのか全く想像が及ばなかった。十月の末に殺されるまでは、いつものように公園や居間で無邪気に遊んでいたはずで、その光景は容易に想像できる。何処でどう間違えたのか、自宅から二十キロ離れたY江の海に捨てられた。こんな理不尽なことがあるだろうか？ いや、死はいつだって理不尽で、納得のいく説明は、あとから生きている者がこしらえる。この母子三人はなぜ自分が死ぬのか納得して死んだわけではあるまい。二歳と一歳の二人の子供に至っては生きることの楽しみも苦しみも、喜びも悲しみも知らないうちに殺されてしまった。そういう運命だった？ そんな言葉は慎しむべきだ。誰がいつ子供たちの運命を決めたのだ。「人はどうせ死ぬ、早いか遅いかの違いだけだ」とでもいった方がまだ正直というものだ。それにしたって、早過ぎる。

殺された母子は小説家にとって全くの赤の他人ではあるものの、同い年の息子と娘を持ち、同じ界限に暮す者として、やり切れない思いだった。妻は「なかよし子ども会」を通じて、殺された奥さんと二人の子供を知っていた。七夕の時は一緒に笹の飾りつけをしたらしい。奥さんは東条可南子といい、長女はあかねちゃん、長男はゆう太くんといった。あかねちゃんは小説家の長男哲人とよく遊んでいたらしい。可南子さんは小説家の妻と同い年で、界限では美人の奥さんで通っていた。

小説家は彼女の姿を三度ほど見かけたことがある。哲人を連れて煙草を買いに行った時、向うは哲人を知っているから、小説家を父親だと思ったのだろう、ためらいがちに会釈してきた。

界限では子供の方が顔も名前も知られている。朝早く首都に出かけ、暗くなってから寝るために帰ってくる父親連中の顔は全く知られていない。明るいうちに子供を連れて歩かなければ、小説家も顔のないよそ者に過ぎない。

二度目に可南子さんを見かけたのは小説家が電車で朝帰りした時だった。ちょうど、彼女はゴミを出しに現れたところだった。向うは起き抜けの顔だし、小説家は宵越しの青白い顔。互いに避けるようにすれ違った。

三度目は家族四人で買物に行った折、生協の地下食品売り場で会った。向うも二人の子供を連れていた。妻は二、三言葉を交わし、小説家は背後で黙って立っていた。この時、あかねちゃんとゆう太くんの顔も覚えた。小説家は人の名前はすぐ忘れるが、容姿の記憶力には自信があった。新聞に載った可南子さんの顔写真は結婚式の時のものだろうか？ 小説家が知っている実物よりも若く、化粧のせいかわやけて見えた。週刊誌にはあかねちゃんを抱いて微笑む可南子さんの写真もあった。育児疲れが顔に出ていて、小説家が朝帰りした時に見た顔に近かった。あかねちゃんの顔は確かに哲人とじゃれ合っていた時の顔と同じだった。この母と娘はあまり似ていない。きつと父親似なのだろう。といっても、小説家は父親の顔を直^じかに見たことはなかった。一歳の長男ゆう太くんの写真はどの新聞にも雑誌にも載っていないかった。ひよつとすると、ゆう太くんを写した写真は一枚もなかったのかも知れない。そのことを妻に話すと、「そういえば」といって家のアルバムを繰り出した。

——なかよし子ども会で運動会をした時に村田さんが撮った写真があるはず。ほら、ここ。